



茨城発
青年海外協力隊

日本も元気にする 青年海外協力隊

世界に笑顔をひろげるシゴト

JICA 筑波

世界に笑顔を広げるシゴトから

JICAボランティアとは、「お互いの価値観・生活様式・文化を尊重し、直接ふれあい、交流しながら、貧困問題、環境問題などその国の社会の抱える問題に取り組み、経済や社会の発展に貢献することを目的としたボランティア」です。

GUATEMALA
HONDURAS
DOMINICAN REPUBLIC
GHANA
HUNGARY
CAMBODIA
PAPUA NEW GUINEA
"IBARAKI" JAPAN

国立研究開発法人
産業技術総合研究所
環境安全本部 環境安全企画部
箕輪 克美
派遣国/ホンジュラス共和国
職種/電気設備

茨城県
保健福祉部 保健予防課
海老澤 加奈
派遣国/グアテマラ共和国
職種/栄養士

NPO法人つくばフットボールクラブ
株式会社つくばFC
経営企画部
関澤 英勝
派遣国/パプアニューギニア独立国
職種/コミュニティ開発

常総市立水海道中学校
教諭
西尾 直美
派遣国/ドミニカ共和国
職種/小学校教諭

水戸市
市民協働部 文化交流課
エンジン01担当
永井 丈博
派遣国/ガーナ共和国
職種/理数科教師

筑波大学
体育系 助教
スポーツ国際開発学共同専攻
山口 拓
派遣国/ハンガリー・カンボジア王国
職種/体育

茨城の未来をひろげるシゴトへ

青年海外協力隊として2年間の開発途上国でのボランティアを通じて、異なる文化や生活、価値観に触れながら、広い視野や豊かなコミュニケーション能力、課題解決力を磨きました。赴任先の国々での活動を帰国後にどのようなカタチで活かし、実践しているかを紹介します。

※所属先、役職などは平成28年9月30日現在のものです。

箕輪 克美

●平成6年度3次隊／派遣国：ホンジュラス共和国／職種：電気設備

仕事だけの人生じゃつまらない 今も南相馬市でボランティア活動続ける

地方病院の電気設備を 任せられる人材を育成

日本の産業を支えるさまざまな分野の研究を行うわが国最大級の公的研究機関・産業技術総合研究所（産総研）環境安全本部に勤務する箕輪克美さんが、青年海外協力隊に参加するきっかけとなったのは、電車の中吊り広告だった。

「東京の電気工事会社に勤めていた時でした。そろそろ地元の茨城に帰らなければと思っていて、何かやり残したことはないかと考えていたんです。そんな時、募集広告が目に入りました。」

箕輪さんは振り返る。説明会に参加すると「コレだ」と思い、迷わず試験を受けた。

派遣国はボツワナかホンジュラスの2カ国が示された。ボツワナでの仕事はエンジンを使った自家発電機の整備だったが、得意分野ではないと考え、専門知識や技術が生かせる可能性が高いと思えたホンジュラスを選んだ。

中米の中部に位置するホンジュラス共和国。赴任地は地方都市の公立総合病院で、現地人のカウンターパート（国際協力の場における現地の対応相手＝C/P）と共に電気設備の保守、点検、維持管理を任された。

「電気が通っていない町でした。病院には発電機がありましたが、診療時間が終わると止まってしまう。急患が来ると慌てて作動させるといった具合でした。発電機は安定していないため、手術中に電気が止まったらどうしようとヒヤヒヤしました。」



C/Pと同じ目線に立って 電気理論を伝える

病院の電気設備を安心して任せられる人材の育成は箕輪さんの任務の一つだった。日本で電気設備を扱うには資格が必要で、法に定められた手順もある。C/Pは電気設備に対する一定の知識は持っていた。しかし、箕輪さんは基本的な理論を知っておく必要があると考え、勉強の場を設けた。

「待ち合わせを決めても来ないことの連続でした。半年が過ぎたころでしょうか。教える立場ということで、上から目線になっていると気がきました。」

箕輪さんは押しつけることをやめ、同

じ目線に立つことにした。トイレが詰まれば一緒に直した。燃料は口でチューブを吸い、重力を利用して補給したが、失敗して口に含み、笑い合ったこともあった。理論は電気の作業と一緒にするなかでさりげなく伝え、C/Pはしっかりと吸収した。

心配だった病院の発電機は、JICAに支援経費を要請してバックアップ機を用意した。車のバッテリーを利用して、井戸水をポンプで汲み上げる設備も作った。「壊れたラジオを直したりもしたので、医療機器も直せるだろうと思われてしまう。さすがに精密機器は直せないで、その辺のジレンマはありました。」と箕輪さんは振り返った。

以前は一人が好きだった 今は人づきあいを重視

協力隊は各国にコミュニティがあり、日本人同士でふれあえる時間も多し。しかし、箕輪さんのように地方に配属された隊員は参加が難しく、より地域に溶け込む必要があった。現地の言葉であるスペイン語は、2カ月の派遣前訓練と3週間の現地研修で大丈夫だったのかを聞くと、

「何とかなるもんですよ。現地の人と

ビールやラム酒を飲んだり、ギターで歌をうたったり、楽しく交流できました。ホームシックはまったくなかった。現地の子どもたちと遊んだことは、楽しい思い出として残っています。」

と懐かしむ。協力隊の活動を通して、自分自身が変わったと話す。

「元々は一人でいるのが好きでした。でも、協力隊を経験して、人と人とのつながりや家族の大切さを重視するようになりました。」

帰国後は民間の工事会社に勤務、結

婚もした。単身赴任も含めた仕事づくりの生活は、以前の箕輪さんなら何でもない事だったが、家族との時間を大切にしたいという気持ちは日に日に増していく。その後、以前に仕事をした産総研が施設整備を担う職員を募集していることを知り、試験を受けた。

「産総研が改組によって自主営繕を行うようになり、施設専門人材を必要としていること、自分の経験を活かし、かつ、研究を施設整備の面から支える大切な仕事であると思いました。」

入所5年を経過し、現在は環境安全本部環境安全企画部施設計画室長として手腕を振るう箕輪さん。施設整備全般を管理する立場となり、部下の育成に取り組んでいる。

東日本大震災で再燃した ボランティア魂

平成23年3月11日の東日本大震災は、眠っていた箕輪さんのボランティア魂を呼び覚ました。何かできることはないかと思い、4月にはいわき市で災害ボランティア活動に汗を流していた。

「災害の大きさから、個人ができることは微々たることだと思いました。その中で何かできないか、何か続けていこうと考えました。」

箕輪さんは青年海外協力隊の茨城県OV（Old Volunteer）会に呼び掛け、栃木県の青年海外協力隊OB会と連携しながら除染ボランティアを開始した。現場のニーズを聞きながら、福島県各地の除染作業や陸の孤島となっていた南相馬市の放射線測定を行った。地道な測定を続け、放射線量が強い場所のマップづくりの支援を行った。

現在は、NPO「南相馬ボランティア活動センター」のボランティアとして、月1回、南相馬市へ足を運び、住民がいつ帰宅してもいいように、留守宅の維持・管理を行っている。

「仕事だけの人生じゃつまらない」と箕輪さん。南相馬ボランティア活動センターでは、ボランティア参加者を募集している。
<http://ameblo.jp/v-home-net>



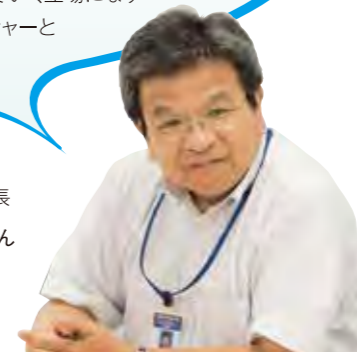
1. 現地の子供たちと 2. 現場作業活動 3. 同僚とビール 4. 職場（病院）全景

VOICE

職場の上司より

産総研本部は事務系の人間が多い組織です。施設専門人材として、知見のある職員を採用することになり、その先駆けとして採用されたのが箕輪です。技術系の人は、じっくり考えて結論を出す人と、経験をベースに直感で閃きで答えを出す人がいるように思います。彼は後者です。仮に方向が間違っていたとしても、修正する能力が高い。これは協力隊での経験というより、資質の問題かも知れません。この能力があったからこそ、制約が多かったであろう協力隊で活躍できたのだと思います。人間関係に長け、部下の信頼も厚い彼が、室長として組織をマネジメントしていく立場になりました。専門知識をもつ新しいタイプのマネージャーとして、注目を集めています。

産業技術総合研究所
環境安全本部建設部 部長
五十嵐 直幸さん



海老澤 加奈



●平成26年度1次隊／派遣国：グアテマラ共和国／職種：栄養士

地域の人々に向けた温かみのあるマニュアル 画期的で分かりやすいと全国に波及

グアテマラの国策だった 栄養失調児の削減

栄養失調児の削減という要請を受け、海老澤加奈さんがグアテマラに赴任したのは平成26年の7月。赴任先は首都から南に約120km、エルサルバドルとの国境に近いフティアバ県だった。

「グアテマラは国を挙げて栄養失調児の削減に取り組んでいました。現地のカウンターパート(C/P)はフティアバ県で唯一の栄養士で、技能も知識もある方でしたが、会議や打ち合わせに追われて現場にまで手が回らず、看護師に状況を聞くだけという具合でした。対人業務で栄養失調児と向き合う人手が絶対的に足りなかったのです。まずは、栄養士の技能や知識を移転できる人材を増やすことが必要だと感じました。」

栄養失調児の削減では、乳幼児の状態をトータルで見る乳幼児健診を導入したほか、重症化を防ぐため、早期発見、早期治療に努めた。また母親の栄養状態が悪いと栄養失調児になる可能性が高いことから、妊婦さんのための教室も企画した。さらに、ヘルシーな日本食を販売し、売り上げを栄養失調児の食事に回したりもした。

「妊婦さん教室では失敗も経験しました。現地の人は事前に告知しても、来たい時に来ってしまう。こちらは午後に教室を予定しているのに、仕事が煩雑な午前中に来ってしまうんです。」

海老澤さんはC/Pらと相談し、「妊産婦向け栄養パンフレット」と「保健従事者向け妊産婦栄養指導マニュアル」を作っ



て全県に配布することにした。現地のマニュアルは文字のみで構成されることが多かった。しかし、字が読めない人いることも考慮し、指さして説明しても分かるようにイラストを多用した。手作り感あふれる温かみのあるマニュアルは、後にC/Pが全国規模の会議で紹介したところ、画期的なマニュアルだとして、全国に波及することになった。

中南米の人たちと うまく仕事をする秘けつ

グアテマラの公用語はスペイン語。海老澤さんの主な仕事は栄養失調児やその母親と向き合って指導すること。そのため、スペイン語が話せなければ仕

事にならない。ラテンアメリカの人たちはとにかく話し好きだ。職場で同僚が長々と世間話をしているのを見て「ヒマがあるなら仕事すればいいのに」と思うことも度々あった。一方で、その輪に加わることで、言葉の壁を乗り越えるための、格好の勉強の機会にした。

「対人業務や教室などで私がスペイン語で説明していると、同僚がスペイン語で同時通訳してくれました。」

職場での長話は人間関係の構築にも大いに役立ったという。

当たり前にはできると思っていることが、途上国ではうまくいかないことも多い。担当を持ち、責任を持って遂行する日本人には大きな悩みにもなる。海老

澤さんは「人を頼るようになるといいみたいです。グアテマラでは、迷惑を掛け合って当たり前なんです。」と、ラテンアメリカで良好な人間関係を築く秘けつを教えてくれた。

生活習慣病が蔓延 対策の必要性を訴える

栄養失調児を減らす業務を続けながら、海老澤さんが心を痛めたのは生活習慣病が蔓延していることだった。糖尿病、肥満、高血圧は国民病と呼べる

ほどだった。現地の人々の主食はトウモロコシが原料のトルティーヤ。炭酸飲料の摂取も多く、野菜不足もあった。こちらは対策が取られておらず、患者は薬に頼るのみだった。

青年海外協力隊は、赴任1年経過時に現地事務所で報告会がある。海老澤さんはデータを使って糖尿病対策の必要性を訴え、関係者の共感を得た。

まずは現地のガイドラインを学ぶため、スペイン語で書かれた資料を辞書を引きながら調べた。「糖尿病クラブ」とい

う名の講習会を企て、ラジオなどメディアの協力を得ながら参加者を募った。しかし、参加者は数人だった。何とか糖尿病患者や予備群を集める方法はないかと試行錯誤し、キリスト教会なら人が集まるのではと考えた。

「教会なら人々の抵抗が少ないはずとしました。交渉に行くと、教会役員が多くが糖尿病で悩んでおり、快く受け入れてくれました。」と海老澤さんは笑う。講習会では、それぞれに合った食事を紹介するとともに、野菜料理のレシピなども指導。参加者もみるみる増え、100人規模の講習会となった。

栄養指導で好評を博したマニュアルを、糖尿病指導でも作って欲しいという要望もあったが、帰国が間近な段階で、作成は後任に託した。今は完成の声を心待ちにしている。

現場の意見を大切に 何ができるか考えたい

小学生の時、授業で国際問題に関心を抱いた。中学生の時に「海外で仕事をしてみたい」と夢を描き、青年海外協力隊の活動に興味を持った。高校時代には国際協力と栄養士を進路のキーワードに掲げ、大学のパンフレットに栄養士を目指しながら青年海外協力隊に参加した人の記事を見つけ、好きな職業の中で国際協力ができる道を見つけた。大学卒業後は茨城県職員として県内の保健所に勤務。数年の経験を積み、現職参加制度を利用して青年海外協力隊に応募した。

一つの目標を実現して帰国した海老澤さん。職場は保健所から茨城県保健福祉部保健予防課に変わった。

「グアテマラでは、とりまとめる側と現場の両方を経験することができました。上層部から下りてくる指示で、現場が混乱することも多かった。協力隊では、現地の人と同じ目線で仕事ができただけが何よりも素晴らしい経験でした。」

最も重要と考える現場は少し遠く離れた。「現場の意見を吸い上げながら、何が必要か、何ができるか」を考えていきたいと現在の心境を語る。時間ができれば、現場に赴き、現場の様子を肌で感じたいと考えている。



1.地域で始めた糖尿病患者向けの教室「糖尿病クラブ」 2.栄養失調児の家庭訪問
3.地元ラジオで活動(乳幼児健診や栄養教室の開催)紹介をした時のもの 4.友人の家で日本食パーティ

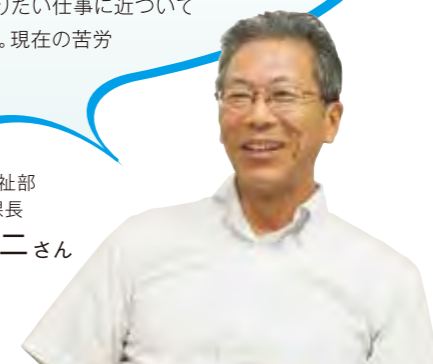
VOICE

職場の上司より

茨城県保健福祉部保健予防課は、県民の健康・疾病対策などを行う部署です。彼女は健康づくりグループの技師として、食生活や栄養改善の仕事を担当しています。ボランティアに積極的な人は、明るさや積極性を本質的に持ち合わせていると感じていました。一緒に仕事をしてみると、やはりその通りで、責任感は強い。県庁で働くことは、出先機関である保健所で働くこととは違います。本庁や議会などの兼ね合い、予算対応など、さまざまな仕事があり、進め方も独特なんです。彼女は今、相当に苦労していると思います。でも、それを乗り越えれば、本当にやりたい仕事に近づいていけるはず。能力は高く、発想力もある。現在の苦労は、必ず花開くはずですよ。

茨城県保健福祉部
保健予防課 課長

根本 雄二さん



関澤 英勝



●平成21年度2次隊／派遣国：パプアニューギニア独立国／職種：コミュニティ開発

途上国の村落を発展させた貴重な経験を 地域サッカークラブで再現させようと日々奮闘

違う世界を知れば 行って体感してみたい

つくばFC(フットボールクラブ)で経営企画部長を務める関澤英勝さん。世界一幸せなクラブづくりを理想に掲げ、日々、奮闘している。

新しい世界、新しい興味に向けて行動を起こすのが関澤さんの気質のようだ。大学時代にはサッカーの指導に興味を持ち、ワーキングホリデー制度を活用してニュージーランドに渡った。

「現地に行くと、お前の英語力では指導はムリと言われました。お金を得ることを目的にワーキングホリデーでビザを取得したのに、気がつけば選手としてグラウンドを走り回っていました。指導といえば、下部組織の子どもたちを教えたことでしょうか。」と懐かしむ。

大学を卒業すると茨城県内の金融機関に就職したが、仕事に慣れはじめる

と、関澤さんの興味の虫が騒ぎ出した。「日本で働くということが分かってくると、これが世界のスタンダードと思っちゃいけない。違う企業、違うルールを体感したいと思いました。ショックを受けることができるのは、日本と違うところ、経済レベルの違う途上国だと思い、青年海外協力隊に応募しました。」

任地は南太平洋のパプアニューギニアで、職種は村落開発普及員(現コミュニティ開発)。パプアニューギニアには800もの民族・言葉があると言われるが、公用語は英語とそれをベース



としたトク・ピシン語だった。

現金収入を増やすこと 簿記を教えることが任務

村落開発普及員としての任務は、設立されたばかりの農業組合的な組織を現地の役人と協力しながら現金収入を増やすこと、さらには簿記を教えることだった。しかし、足し算も引き算もできない人が多く、「家計簿的なもの」を継続的に教えたという。

地域の主な産業である農業は、採取を中心としていた。栄養のある米の栽培も試みてはいたが、精米など手間が掛かることから、根づいてはなかったという。農作物を売り、収入を得ても

管理はまずで、何もしていない人の酒代になっていたりもした。

「がんばる人と有力者を見つけること」が、JICAボランティアの基本だと語る関澤さん。同じ時期にJICAのシニアボランティアがティラピア(鯛に似た川魚)の養殖技術を教えていたため、漁業に携わる人々の仕事に対する意識は高かった。また、養鶏業、花卉業など分野にもやる気を見せる人は多かった。

関澤さんは業種別にリーダーの育成、帳簿の付け方の指導、経営指導などを行った。人を集めるために当初はお菓子などを用意したところ、熱心に聞き入る人は増え、後にお金を支

払って受けるセミナーも開いた。政府関係者、鉱山の経営企画に携わる人、プランテーション実践者などの話を聞くセミナーで、参加費は月収の1割近い高額なものだったが、約40人が参加した。

「お金を払えば本気になるだろうという考えもありました。地域は男尊女卑の風習が残る地域でしたが、ランなどの花を売るグループは女性が中心でした。働く女性たちが旦那を巻き込み、リードするケースもありましたね。」

関澤さんは感慨深げに話す。

地域の補償金を活用し 舟やモーターを購入

経営センスも光った。地域はオクティ鉱山の汚染被害地区で、補償金があることに目をつけた。販路を拡大させるため、村を流れるフライ川を10時間ほど行った所にあるマーケットに収穫物を出品させようと、補償金を申請し、舟や発電機、モーターなどを購入した。

「いきなりお金やモノを与えることは

望ましくないとされる人もいます。しかし、途上国に到来する発展の波は止められません。村の人たちは補償金の存在を知らなかった。現地の人ができないことをするのが私たちの使命。過剰にならない程度に必要なモノを与えてきっかけを作り、やる気のある人が規範となって発展させていけばいい。」

地域には病院がなかったため、舟は地域の病人を街に運ぶためにも役立てられたという。

協力隊活動以外の時間はサッカーを楽しんだ。街の社会人チームの練習に参加したが、一向にボールを使う練習が始まらない。聞けば貴重なボールは試合用に取っておくためだった。関澤さんは自らボールを購入するとともに、以前から知り合いだったつくばFCに連絡し、ボールとユニフォームを寄贈してもらった。「自分の足技を見せて、尊敬された気持ちもあった」と笑う。

つくばFCを 人々の交流拠点に

帰国後は民間企業に勤めたが、仕事が合わずにストレスが積もり、協力隊の時にもお世話になったつくばFCの門を叩いた。つくばFCはJリーグやなでしこリーグ参戦を視野に入れた地域のサッカークラブ。ここで関澤さんは水を得た魚のように輝きを取り戻す。

関東1部やチャレンジリーグに在籍するチームの試合の集客アップを図る一方、選手の奮起と観客の厳しい目を求めるため、有料試合に挑戦するほか、地域のネットワークづくりに飛び回った。サッカーくじtotoのスポーツ振興のための助成金を活用し、イオンモールつくば敷地内にクラブハウスを完成させたり、筑波学院大学の人工芝グラウンドを実現させたりもした。

「つくばFCはスポーツをしない人にも開かれたクラブです。JICAとも提携していますので、国際協力に興味がある人も、ぜひ訪ねてみて下さい。スポーツを中心に人々の交流拠点にしていきたいと考えています。」

パプアニューギニアでの経験は、つくばFCを躍進させるための大きな原動力となるはずだ。



1.任地西州キウガにて地元有志に「ビジネスアイデア講習会」を開催 2.任地キウガでは、川を利用した移動が多い 3.村の巡回指導した時の集合写真 4.教会グループに「家計簿のすすめ」講座を開催



職場の上司より

かつてのつくばFCは、サッカー指導者中心の組織でした。彼の加入でビジネスマネジメントの視点が加わったことは心強く、totoの助成金申請の立役者になりました。コミュニケーション能力が高く、周りの空気を和ませてくれることも彼の才能です。これは先天的なもので、協力隊でさらに自信をつけたのではないのでしょうか。他の指導者が二の足を踏む難しい指導も買って出られます。社会人クラスの参加者が減った時も、知的障がい者へのサッカー教室にも、関澤が名乗り出てくれました。職業や年齢が多岐にわたる人々とコミュニケーションを築き、今ではたくさんの参加者が集うようになっています。

NPO法人 つくばフットボールクラブ理事長
株式会社 つくばFC 代表取締役

石川 慎之助さん



西尾 直美



●平成16年度1次隊／派遣国：ドミニカ共和国／職種：小学校教諭

異国での算数指導法を確立するために 同僚の教材発掘を我慢強く見守る

疲れていた自分に喝 視野を広げ、経験を積もう

「筋道の通った先生。言いにくいこともしっかり言ってくれる。」と教え子が語る中学教師・西尾直美さんは、平成16年から現職教員特別参加制度*で青年海外協力隊に参加した。

現職教員特別参加制度は、①失職せずにJICAボランティアに参加できる。②3月末に任期終了の派遣のため、新学期(4月)から職場復帰できる。③日本の学校教育にJICAボランティアで得た知見を還元しやすくなった。等、参加教員・学校にとってのメリットがある。

「家と職場を往復するだけの日々が続いていたんです。疲れていました。教員が疲れているのはダメだ。経験を積み、視野を広げなければと考えました。」

西尾さんは協力隊への参加の動機を振り返る。協力隊への参加が決まったのは3度目の応募だった。2度目であきらめようとしていたが、「挫折や失敗を知っている教師がいてもいいのでは。その経験は教え子のためになる。」という保護者の言葉に励まされた。

*平成13年度に文部科学省と外務省、JICA(当時は国際協力事業団)、各都道府県教育委員会などの協力により創設された制度。日本での教育経験を活かし、教育分野での国際協力を行い、帰国後に自身の経験を教育現場に還元することを目的としている。

先生が変われば 子どもも変わるはず

派遣国はカリブ海に浮かぶドミニカ共和国。職種は小学校教諭だった。専門は英語だったが、協力隊に英語を教える職種はない。算数の指導プログラムの確立



が西尾さんへの要請だった。うまくいかないことが当たり前なのが彼女の常だが、「教えるという以前の問題でした。政権が変わって学校は機能しておらず、閉鎖状態が続いていました。」

赴任して最初に取り組んだのは生徒が学校に来られるようにすることだった。青年海外協力隊茨城県OV会に資金援助を呼び掛けてトイレを設置するなど、最低限の環境を整え、児童の家庭訪問に明け暮れた。

「学校に来られるようになってからも席に着かない、外に出るといった具合の好き勝手放題。縁故採用で割り算ができない教師もいました。」

算数の授業は黒板の文字をノートに

写すことが中心で、ノートの出来栄が評価されていた。8歳の時、進級するための試験があるが、留年する子どもが続出するのも当然だった。何回も留年すると学校に来なくなり、ストリートチルドレンになる負の連鎖もあった。

「まずは教師の質を高めよう。先生が変われば子どもも変わるはず。」西尾さんは四則演算の指導を徹底し、校内研修が開ける環境づくりに取り組んだ。教育に情熱がある同僚も協力してくれた。JICAからの活動資金を用いて、問題がプリントされたワークシートを(西尾)自ら作成し、3つのクラスで導入すると、成果はすぐに現れ、他の教師も大きな興味を抱いた。

力のある人を見つけ 波及させることが大切

算数の教え方を確立するのが西尾さんから協力隊の役割。ドミニカ共和国では説明が中心だが、日本ではおはじきなど具体物を使って理解させる。メンバーの中には日本の算数セットを取り寄せる人もいた。「なるほど」と思ったが、中南米で算数を教える協力隊員は、教材を中南米に浸透させる目的もあり、現地にあるもので教えることが重要と考えた。信頼できる同僚に話す

と、興味を示し、熱心に教材を探しはじめた。試行錯誤を経て、あちこちに落ちているキャンディーの棒を使おうと提案された。

「現地の同僚が考え、見つけてくれたことが何より嬉しかった。」と西尾さん。力のある人を見つけて授業を作り、公開して波及させる。これが途上国の教育を向上させるためのメソッドだと確信した。

現職参加教員の経験を 教育の場に還元しよう

現在、現職参加教員の経験を教育の場

に還元していくことを目的に「現職参加教員ネットワーク(仮称)」を立ち上げた。また、子どもたちに向けて、一つの国をテーマに国際理解教育を進めていこうと思案中だ。現在はモンゴルにいる現職教員隊員と連絡を密にとり、モンゴルと日本の関係を学ばせるとともに、スカイプなどを利用して、子ども同士を交流させていこうと、青年海外協力隊経験教諭が集い、話し合いを続けている。

「日本の子どもは優等生だと思う。例え劣等感を抱いたとしても、世界として見れば劣等生ではない。恵まれた国に生まれたのだから、世界に何らかの還元をしていく必要があり、皆、その能力を持っている。」

帰国して数年後、途上国の貧しい子どもたちに対し、何かできることはないかと中学生に投げかけたことがあった。返ってくる答えは「募金」だった。募金だけではそのお金がどう使われているかを知ることができない。西尾さんはお金ではなく、鉛筆、消しゴム、定規を募った。それらを持ってドミニカ共和国に飛び、現地の子どもたちが喜ぶ様子を伝えた。生徒は人のために役立つ充実感を味わった。短い鉛筆を提供したことを後悔する生徒もいた。「役に立ちたいなら相手の喜びをイメージすることが大切」と学んだ瞬間だった。

教師という職業に 今は喜びを感じている

ドミニカ共和国で教鞭をとっていた時、母親が訪ねて来た。現地の様子を見て「昔の日本に似ている。」と話した。子どもたちは外で元気に遊んでいる。周りの大人は「手は掛けずに気にかけている。」子どもが成長するうえで、そんな環境がうらやましく思えた。

帰国後はすぐに成果を求めることをやめた。今、教えていることを生徒はどこで役立てるのか、どう感じて人間形成にどう生かすのかを重視するようになった。生徒が20歳くらいになったとき、「先生からこんな事を言われた、教えられた。」と、思い出してもらえればうれしいと話す。

学生時代はマーケティングや経営に関わる仕事に就きたいと思っていた。今は「人を育てるクリエイティブな仕事」と、教師という職業に魅力と大きな喜びを感じているという。



1.2年間、共に授業づくりを行ってきたカウンターパート達(校長、教頭、教務、担任) 2.帰国後、日本の中学校での寄付(鉛筆や消しゴム)を学校へ届ける 3.カウンターパートが考えた教具(アメの棒を数え棒に、牛乳パックをケースに) 4.カウンターパートによる模擬授業の様子

VOICE 職場の上司より

水海道中学校では平成28年度から3年間、「ユニバーサルデザイン教育」の推進を教育の柱に据えています。研究主任としてその中心を担っているのが西尾先生です。従来の障害あるなしにとどまらず、通常の子どもの生活にもプラスになる教育にしていきたいという考えがあり、西尾先生の協力隊の経験は必ず役に立つと考えています。また、英語教師としてだけでなく、2学年の学年主任としてもリーダーシップを発揮しています。中学2年生は心が揺れ動く難しい時期ですが、生徒からも「優しさや厳しさを持ち合わせている」と信頼されています。指導者としての資質が高いので、今後、どんな活躍を見せるのか、楽しみにしている教師です。

常総市立水海道中学校
校長
岡野 克巳さん

永井 丈博



●平成23年度1次隊／派遣国：ガーナ共和国／職種：理数科教師

大学生として臨んだアフリカでの化学教師 楽しく好奇心の湧く授業づくりに熱意

初めての海外

初めての日本人教師

パイロットになりたい。永井丈博さんは子どものころからの夢を抱きながら大学に通っていた。茨城大学理学部で宇宙の研究を専攻していたことも、パイロットになった時に役立つと感じたから。国際感覚を磨くことも必要と、留学を考えていた時、青年海外協力隊の理数科教師は経験や資格がなくても可能と知り、思い切って応募し合格。大学を休学して参加した。

赴任地はガーナ共和国。初めての海外だった。怖い気持ちもあったが、自分にムチを打って旅立った。アッパーウェスト州のカレオ村にある実業高校で化学を教えることが、与えられた任務だった。「屋根のある青空学校という感じでした。生徒は15歳以上で、私よりも年上の人もいます。初対面の時は緊張しました。」と永井さん。自己紹介をすると初めての日本人ということもあり、生徒は大きな興味を抱いた。「津波は大丈夫だったのか？」と聞いてくる生徒もいれば、日本と中国の区別がついていない生徒もいた。国、人種、文化、宗教が違う人々に受け入れられたことに大きな喜びを感じたという。

授業を面白くしたい

理想を掲げて試行錯誤

ガーナの公用語は英語。実は永井さん、英語があまり得意ではなかった。大学のESS(English Speaking Society)サークルでは落ちこぼれだったと笑う。



現地に行ってしまうと何とかなると楽天的に考えていた。当初はなまりの強い英語や現地のダガラ語に驚いたが、同僚や生徒の助けもあり、英語はすぐに上達した。

指導にあたっては「授業を面白くしたい」と理想を描いた。暑い地域のため、疲れから授業中に寝る生徒も多かった。また、教科書を持っていない生徒もいたため、「聞くだけで分かる授業・好奇心が湧く授業」を心掛けた。授業には化学実験を多く取り入れた。「粉塵(ふんじん)爆発」というヒット作も生まれた。小麦粉とロウソク、ストロー、ダンボールを使い、巻き上がった小麦粉に引火して爆発が起こるといふ実験で、手軽にできるよ

う、工夫してコンパクトな実験に仕上げた。この実験は他の隊員にも伝わり、各地で人気を集めたという。

「セロファンテープなど地元で手に入りやすい道具は使わず、ローカルマテリアルにこだわりながら、さまざまな実験教材を作りました。徹夜で作った実験教材を上司が誤って踏みつぶしてしまい、心が折れたこともありました。」

教材となる実験を増やそうと奮闘する日々。その姿に興味を示し、永井さんが考えた実験を授業に取り入れる同僚も現れた。「何よりも嬉しかった出来事」と永井さんは感慨深げに話す。

実験を通して心を通わせた同僚とは、日常生活でもよき友人となった。二

ワトリにたくさん卵を産ませるにはどうしたらよいかなど、さまざまな相談も受けた。ドイツ人ボランティアとの交流も忘れられない思い出になったという。

頻繁に起こる停電や断水 不便さも楽しみに変える

困ったことは、断水や停電が頻繁に起こること。1日で復旧することもある。3カ月かかることもあった。2年間のうち半分は水道が使えない状態だった。暗闇で料理を作る時の炭の火

花、夜空を彩る星空の美しさ…。不便さは、森羅万象を楽しむ時間にした。

ガーナでは指導者としての責任感を持って過ごした。「教育を受けられるのは恵まれた子どもたち。教育を受けることができない子どもの中には、外国人を見ると石を投げたり、暴言を吐く子もいました。その子を捕まえて親の元に連れて行き、間違ったことをしている」と注意したこともありましたが、「世界基準の常識を知って欲しかった。」と永井さんは振り返る。

地域のために働くのもいい 職業選択肢が広がる

大学生で協力隊を経験する人は決して多くない。復学後は大学を中心に協力隊での経験を伝えた。ボランティアについてはもちろん、人と関わることの素晴らしさ、グローバルな価値観を持つ事の大切さを知って欲しかったからだ。

パイロットへの道は開けなかった。しかし、「協力隊ではガーナの人いろいろな助けられた。地域の人たちのために働く仕事もいい」という気持ちが芽生えていた。永井さんは水戸市が青年海外協力隊やボランティア経験者を対象に職員を募集する特別選抜枠制度を知り受験。難関を突破し、晴れて水戸市の職員となった。

「入庁した日に、『上司には若い人の意見やアイデアを受け入れるように言っている。どんどん意見を言って欲しい』という市長の言葉はうれしかった。」と目を細める。現在は市民協働部文化交流課に所属する。取材時は平成29年2月17日～19日に開催される「エンジン01文化戦略会議」～オープンカレッジin水戸への準備を進めていた。「エンジン01文化戦略会議」は、文化・芸術・スポーツなど、各分野の第一線で活躍する人々が、日本文化のさらなる深まりと広がりを目指して参集したボランティア集団で、オープンカレッジでは、県内各地で文化戦略会議の会員が地域の人々と交流する。筑西市出身のオペラ歌手・中丸三千繪さんを大会委員長、作曲家の三枝成彰さんを副委員長に据え、作詞家の秋元康さん、俳優で映画監督の奥田瑛二さん、作家の林真理子さんが実行委員会委員に名を連ねており、永井さんも成功へ導くためのスタッフとして頑張っている。

「私の勤務する部署は、さまざまなイベントを持つ課です。青年海外協力隊をはじめとするボランティア経験者は実行力があると思います。水戸市役所で活躍できる人が増えるよう、特別選抜枠をPRしていきたい。」

力強く話す永井さんを見守る同僚の笑顔から、大きな期待が垣間見えた。



1.理数科ワークショップでの出張授業「電磁力とは?」 2.給食はもちろん頭で運びます
3.愛すべき生徒との最後の一枚 4.授業後の質問タイム

VOICE

職場の上司より

一緒に仕事をして2年目になりますが、コミュニケーション能力の高さ、行動力、意思の強さは特別なものを感じています。職場のムードメーカーとしても欠かせない存在です。「エンジン01文化戦略会議」などのイベントを進める部署ということもあり、著名な方々と打ち合わせや食事をする機会もあるのですが、そんな時にもひるむことなく、堂々としている姿には驚きます。性格もあるとは思いますが、青年海外協力隊で異文化に飛び込み、揉まれてきた経験が大きいのではないかと感じています。さまざまなイベントを抱えている部署ですので、持ち前のバイタリティーや協力隊での経験を存分に発揮し、イベントを成功に導いて欲しいと願っています。

水戸市市民協働部
文化交流課 係長
大森 明彦さん



山口 拓

●平成10年度3次隊／派遣国：ハンガリー ●平成15年度短期／派遣国：カンボジア王国／職種：体育



経験を重ねて磨かれた交渉力という武器 発展途上国での国際貢献活動に活かし続ける

カンボジアの スポーツ振興に貢献する

山口拓さん(筑波大学体育系助教)は現在、日本とカンボジアを行き来しながら、「スポーツを通じた国際開発」や「スポーツが各開発課題に果たす役割」などの研究に明け暮れる。

カンボジア五輪委員会のアドバイザーを務め、各種の提言を行うほか、NGOの技術顧問としてカンボジアの小中学校体育科支援をサポートするなど、カンボジアの体育・スポーツや社会の発展に向けた様々な活動に関わっている。また、外務省やスポーツ庁などが主導し、日本スポーツ振興センター(JSC)が運営するSPORT FOR TOMORROW(SFT)事務局をサポートしつつ、JICAを通じて筑波大学の学生をカンボジアに派遣し、現地学生と共にスポーツを通じて地域の障がい者理解を高める教育活動なども行っている。

途上国と先進国の差 スポーツで埋められないか

陸上競技でタイムを削る日々を送っていた山口さんに転機が訪れたのは大学1年生の時だった。「ケガで練習ができなくなりました。このまま競技では歩んでいけないと感じ、当時、興味があったビジネスに関与することを決めました。『ユースリーダーツアー』の企画を旅行社に持ち込み、実現しました。」と振り返る。卒業後は出版社勤務を経て、子ども達の体育指導を行う人材派遣事業を起こすも、出会いがあって単身カナダへ。私立学校の体育教師を務めながら、地域の人々に生涯スポーツの指導を



行うなど、文化や制度の違いを学ぶとともにコミュニケーション能力を磨いた。「実はカナダに行く前、青年海外協力隊に応募したのですが、落ちてしまったんです。」と話す山口さん。さまざまな経験を積むうちに「先進国と途上国では暮らしに違いがあるのではないかな。もし、そうならスポーツで貢献できないか。」という思いが込み上げてきたという。途上国の人々のために、役立つ経験ができると考えたことが協力隊に応募した理由だった。

カナダに渡って1年が過ぎた平成10年3月、念願の協力隊への参加が決まった。派遣国はハンガリーのダバシュ市。職種は体育、配属先は公立高校だった。現地での授業は、生徒にボールを渡してサッカーやバ

スケットに講じる息抜きの時間になっていた。山口さんは準備運動を徹底し、テーマを与えてスポーツに取り組みさせた。放課後には、拳法スクールを開講したり、地域クラブが主流のスポーツ大会に学校クラブが参加できるように交渉したりもした。体育の成績が不振な生徒に単位を与えるか否かで、校長と激論を交わしたこともあったという。

市のスポーツ振興策を 元五輪候補選手の市長に具申

ダバシュ市に派遣されたのは市長が交替したばかりの時だった。新市長は元五輪候補選手で市民スポーツの興隆に力を注ぐ方針を掲げていた。これを聞いた山口さんは心躍らせた。

大学では、恩師が専門とする「公共サービスのマーケティング」に出会い、スポーツにアクセスできない人々に戦略を講じて機会を増大させることなどを学んでいた。そこで、山口さんは、市民がスポーツに接する機会を増やすための企画案を練り、市長に届け続けた。熱意は伝わり、青少年スポーツ課が新設されることになった。

「ハンガリーでは知識不足に悩みました。行政サービスを向上させるには、まず、政策を知らなければならない。そう感じて、帰国後は政策を学ぶために大

学院へ進みました。」

大学院で学ぶだけでは片手落ちになると、五輪メダリストの有森裕子氏が設立したNPO ハート・オブ・ゴールド(HG)や世界オリンピック協会(WOA)での活動も継続した。HGの活動ではカンボジアに派遣され、アンコールワット国際ハーフマラソンをサポートし、平成15年にはカンボジアのスポーツ事情に精通していたことから、青年海外協力隊員として2度目の派遣を経験した。

派遣中はスポーツ指導者育成の祭典などの運営に携わり、元なでしこJAPAN監

督の佐々木則夫氏や他のオリンピックとカンボジアの若手スポーツ指導者育成に取り組んだ。また、JICAのNGO技術者派遣制度で国連東ティモール暫定行政機構に派遣され、独立式典行事の副統括や国家開発計画の策定なども手掛けた。

助けに行くんじゃない 助けてもらうんだ

大学院卒業後は、HGのスタッフとして、単身カンボジア入りし、現地事務所の設置、スタッフの雇用、新規事業の調整などに取り組んだ。スポーツ指導者育成事業は、その後、JICA草の根パートナー事業の小学校保健体育科支援事業に発展し、JICA事業のプロジェクトマネージャーあるいは教育省総局長のアドバイザーとして従事した。国際チャリティーマラソンの現地化に見通しが立った平成24年秋、山口さんは帰国し、筑波大学・体育系の助教として後人の育成を開始した。

抜群の行動力と企画力でエネルギーに活動する山口さん。その礎は、何事にも明確なビジョンがないと先へ進めさせない父親、世界の不都合な事実を示し続けた母親によって磨かれたという。「高校進学にも理由を迫られたが、逆にビジョンさえ示せば、何にでも挑戦させてくれる家庭だった。」と振り返る。兄妹は海外在住と冒険家だというも頷ける。

途上国の人々と日本人の違いを聞くと「途上国の人々は皆、心が豊かです。子どもから大人まで、人と人のつながりが深く、助け合って暮らしています。現代の日本人が失いつつある自信を持っています。今の日本はあまりにも合理化が進み、欧米スタイルが日本人の気質に合わなくなっているのかも知れません。世界的に見て、日本人の発想力と応用力は群を抜いていますので、是非、自信をもって能力を発揮してもらいたいですね。こうした思考に至れたのは、協力隊の経験があったからだと思っています。学生にも協力隊への参加を強く推奨しています。『助けに行くんじゃない、助けてもらいに行け』ってね。」

自身を高めたい一心で、次々に目標をクリアし続けた山口さん。途上国のスポーツ振興やスポーツを通じた課題解決を担う「高潔の志士」の今後の活躍が楽しみだ。



1.スポーツ大会で入賞し報告を受ける 2.教育行政関係者と
3.スポーツ祭 4.日本の日で羽子板を紹介

VOICE 職場の上司より

平成18年、JICA中国、ハートオブゴールド、筑波大学の提携による草の根技術協力事業で、カンボジアの「小学校保健体育学習指導要領」を策定することになり、現地でネゴシエーションができる人材として選ばれたのが彼でした。内戦で教育者が殺されてしまった中、限られた時間でゼロから作る任務でしたが、現地の信用を築きながら完成させ、カンボジアの教育人材も育てているという成功事例です。スポーツを通じた開発支援というニーズが高まる中、それに関わる人材を確保するため、筑波大学は彼を招きました。筑波大学がJICAとリンクするために調整したのも彼です。スポーツは世界に貢献できる有効なツール。大学でも彼と考えを共有する仲間が増えています。

筑波大学
体育系 教授
岡出 美則さん





近藤 桂

平成18年度3次隊
派遣国：ポリビア多民族国
職 種：陶芸



井坂 佳一

平成20年度1次隊
派遣国：パナマ共和国
職 種：小学校教諭



塩畑 絵梨

平成22年度1次隊
派遣国：ブルキナファソ
職 種：小学校教諭



鈴木 聡志

平成22年度1次隊
派遣国：エチオピア連邦民主共和国
職 種：体育



深谷 結

平成22年度3次隊
派遣国：セネガル共和国
職 種：小学校教諭



星野 優輝

平成23年度2次隊
派遣国：ラオス人民民主共和国
職 種：バレーボール



桑野 利一

平成24年度1次隊
派遣国：スーダン共和国
職 種：電気・電子設備



大島 慧

平成24年度1次隊
派遣国：サモア独立国
職 種：理数科教師

世界に笑顔を、茨城の未来を広げよう。



茨城県青年海外協力隊を育てる会
会 長 小川 一成

昭和41年、私が大学へ入学した年に青年海外協力隊がスタートしました。当時私は新聞でその記事を見つけ是非参加したいと思いましたが、とてもハードルが高く私にとっては夢でした。その翌年に1年間大学を休学してヒッチハイクで世界を旅し、行く先々で多くの方々にお世話になりました。この事が原点にあり今度はお返しをしたいという思いで「茨城県青年海外協力隊を育てる会」を20年前に設立いたしました。日本の若者が途上国の国造りに現地の人と同じ目線で汗を流す

ことは最高の国際貢献です。「協力隊は日本の宝」この旗を高く掲げてこれからも振り続けたいと思います。

茨城県青年海外協力隊を育てる会
JICAボランティア支援者の皆様、隊員のご家族によって組織されている会で、茨城県出身のボランティアに多大なご支援・ご協力をいただいています。また、開発教育や国際理解教育を積極的に県民運動として推進しています。



蛸原 園恵

平成24年度1次隊
派遣国：ソロモン諸島
職 種：作業療法士



清水 康登

平成24年度2次隊
派遣国：エクアドル共和国
職 種：自動車整備



花ヶ崎 和希

平成24年度3次隊
派遣国：モルティブ共和国
職 種：体育



石橋 洋二

平成24年度3次隊
(シニア海外ボランティア)
派遣国：エルサルバドル共和国
職 種：工作機械



前田 浩徳

平成24年度3次隊
派遣国：ウガンダ共和国
職 種：理数科教師



福元 エリ子

平成25年度1次隊
派遣国：エチオピア連邦民主共和国
職 種：小学校教諭



小坂 啓司

平成25年度1次隊
派遣国：エチオピア連邦民主共和国
職 種：経済市場調査



守永 大策

平成25年度2次隊
(シニア海外ボランティア)
派遣国：ヨルダン・ハシメット王国
職 種：経営管理



青年海外協力隊茨城県OV会
会 長 大橋 暁
平成2年度3次隊
水戸市在住
派遣国：モロッコ/職 種：測量

我々、多くの青年海外協力隊OVは、全く違う派遣国、職種、年齢、性別、経験にもかかわらず、初めて会った同士でも協力隊経験者というだけで、意思の疎通が簡単に出来るという不思議な体験をしています。それは一概に仲間意識というよりも、それぞれが文化や習慣、宗教も日本とは全く異なる任地で、現地の人達と一緒に、同じように生活してきたことで自然に身についたコミュニケーション能力のおかげであるといえるでしょう。青年海外協力隊という途上国の人に自分の持っている技術を伝えるというイメージがありますが、実際はそれだけでなく、日本に居ては出来ない貴

重な体験をすることで視野が広がり、コミュニケーション能力や思い通りに行かない事態を自分で解決させる能力、忍耐力等を磨き、一皮も二皮も剥けて、これ以上ない自分のツールを身に付け、帰国してきます。あなたの笑顔で世界を、日本を、そして、茨城を元気にしてみませんか？ 青年海外協力隊茨城県OV会はそんなあなたを応援致します。

青年海外協力隊茨城県OV会
茨城県在住・出身のJICAボランティア経験者で組織されている会で、茨城県出身のボランティアに多大なご支援・ご協力をいただいています。また、JICAボランティアの経験を活かし、災害ボランティアや地域貢献活動、国際理解教育や応募希望者への応募相談などを行っています。

